

神さまの力と共に生きる

小笠原 純

奨励者紹介[おがさわら・じゅん]

日本キリスト教団平安教会牧師

さて、月が満ちて、エリサベトは男の子を産んだ。近所の人々や親類は、主がエリサベトを大いに慈しまれたと聞いて喜び合った。八日目に、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした。ところが、母は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。しかし人々は、「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもない」と言い、父親に、「この子に何と名を付けたいか」と手振りでも尋ねた。父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた。近所の人々は皆恐れを感じた。そして、このことすべてが、ユダヤの山里中で話題になった。聞いた人々は皆これを心に留め、「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。この子には主の力が及んでいたのである。

(ルカによる福音書 1章 57—66 節)

メレ・カリキマカ

街もクリスマスの飾りになり、だんだんとクリスマスが近づいてきます。

「メレ・カリキマカ」というのは、ハワイ語で「メリー・クリスマス」という意味です。クリスマスと言えば、ロマンチックなホワイト・クリスマスというふうに思いますが、でも世界は広いですから、常夏のハワイでもクリスマスは祝われています。イエスさまがお生まれになられたことが、世界中で祝われているということは、とてもうれしいことです。

ハワイは多民族社会です。いろんな人種の人たちがすんでいます。そしてこの人種が極端に多いということがありません。ですからどの人種も主流にはなれないのです。ハワイでは「ハパ」という言葉がよく使われます。この「ハパ」という言葉はもともと「ハーフ」が語源となっている言葉です。二種の混合という意味です。ですから白人と日系とか、中国系とハワイアンの中に生まれた子どもは、みんな「ハパ」になります。ハワイでは「ハパ」が当たり前です。

多民族社会では「互いに受け入れ合う」ということが大切です。そうした寛容の精神をよく表している言葉が、「アロハ」という言葉です。アロハというのは日常会話の中では、「こんにちは」とか「よくいらっしゃいました」という言葉として使われます。もともと先住民であるハワイアンの言葉です。「アロハ」は互いに愛し、敬い、すべてを大切に作る心、具体的には、人に親切にしたり、同情したり、助け合うことです。

ハワイ語に訳されている『きよしこの夜』(ポー・ライ・エー)では、聖母マリアのことが「最愛の母」と訳され、イエスさまのことが「最愛の聖なる子」と訳されています。アロハは「最愛の」「あなたのことをとって愛しています。とっても大切に思っています」という意味の言葉です。「あなたのことをとって愛しています。とっても大切に思っています」という言葉が、「こんにちは」「よくいらっしゃいました」という言葉であるわけですから、なかなかご機嫌な社会です。

Mr.San Cho Lee

とはいうものの、多民族社会はいろいろな人がいるということですから、なかなか大変です。ハワイで1970年代に流行した歌に、『Mr.San Cho Lee』（作詞作曲 MAGOON JUN EATON）という歌があります。ハワイに住んでいるいろいろな人種の人たちをからかっている歌です。中国人、白人、日本人、フィリピン人、ハワイアン。Mr.San Cho Leeとは中国人です。「サン・チョー・リーさんはライチをたくさん持っている。たくさんライチ、でも私にはくれません。そう、彼は昔ながらの中国人です」。「コンラード・ジョーンズさんはプールをたくさんもっています。プールをたくさんもっています。でもそのプール、私には開放してくれません。そう、彼は昔ながらの白人です」。「たなかかずおさん、カメラをたくさんもっています。たくさんカメラ、私にはくれません。そう、彼は昔ながらの日本人です」。「コンセプションさんは闘鶏をたくさんもっています。たくさん闘鶏、でも私にはくれません。そう、彼は昔ながらのフィリピン人です」。「カマカウイロレさんはなにも持っていません。なにも持っていないので、私にあたりちらします。そう、彼は昔ながらのハワイアンです」。こんな感じで、中国人、白人、日本人、フィリピン人、ハワイアンをからかう歌です。

でもこの歌の最後の歌詞にはこうあります。「私たちは他人種をからかいながら、でも同じところで暮らしている。これってすごいことだよね」(All us guys we tease the other race. It is amazing we can live in the same place)。この『Mr.San Cho Lee』という歌が流行したのは、この言葉が最後にあるからです。「私たちは他人種をからかいながら、でも同じところで暮らしている。これってすごいことだよね」。多民族社会ですからそれぞれの民族にはそれぞれの文化や伝統があります。それは簡単に理解し合えるわけでもない。でも私たちはそれぞれの民族をからかい合いながら、でもこのハワイで暮らしている。それはやっぱりとっても素晴らしいことだし、すごいことだ。この歌はそうようにハワイの社会の寛容さを歌っています。

私たちの世の中は、いろいろな考えを持った人がいて、またいろいろな習慣や伝統をもって、それぞれの人々が生きています。そしてそのことを尊重し合って、そして互いに受け入れ合い、互いに愛し合って生きています。もちろん違いがあるわけですが、でも一緒に生きている。それは素晴らしいことだと思います。そしてイエス・キリストはすべての人の救い主として、私たちの世に来てくださいました。このことに心から感謝して、イエスさまのご降誕をお祝いしたいと思います。

洗礼者ヨハネの誕生

今日の聖書の箇所は「洗礼者ヨハネの誕生」という表題のついた聖書の箇所です。バプテスマのヨハネのお父さんのザカリアは、聖所で主の使いに出会い、ヨハネの誕生を知らされました。そしてその証としてヨハネが誕生するまで、口がきけなくなっていました。ザカリアもエリサベトも年を取っていましたので、エリサベトに子どもが生まれるということは、とてもうれしいことでした。ですからエリサベトが男の子を産んだという知らせを聞いて、近所の人々や親戚もみんなお祝いに駆けつけてきました。そしてユダヤ人は生まれて八日目に割礼を施すことになっていました。そしてそのために来ていた人々が、生まれた子どもの名前を相談しています。

親戚のみんなが「ザカリアという名前がいい」と言っているのに、母親であるエリサベトは「いいえ、名

はヨハネとしなければなりません」と言いました。みんなは「そんな名前、親戚の中にいないから、やめとけ、やめとけ」と言いました。そして父親であるザカリアに「この子に何と名を付けたいか」と手振りで尋ねました。するとザカリアは字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書きました。すると、人々は驚きました。

「あなたは口が利けなくなり、この事が起こる日まで話すことができなくなる」という主の天使の言葉通りに、ヨハネが誕生し、そしてヨハネの名前がつけられたので、ザカリアは話ができるようになりました。そして口が利けるようになって一番最初にしたことは、神さまを賛美することでした。「ああ、えらい目にあったで」というふうに愚痴ったりはしませんでした。そしてみんなにいままであったことを話しただろうと思います。そしてみんなが「ああ、そんなことがあったのか」「いったい、この子はどんな人になるんだろうねえ」と言ったわけです。まあ、いろんなことがあったけれども、バプテスマのヨハネは「この子には主の力が及んでいる」と言われる人になるわけです。

わいわい、がやがや、おめでとう

みなさまはこの「洗礼者ヨハネの誕生」という聖書の箇所を読まれて、どのように思われたでしょうか。私はなんとも、わいわい、がやがやしている聖書の箇所だなあと思いました。いろんな人がいるもんだなあと思います。生まれた子どもを前に、お父さんやお母さんを差し置いて、みんなで名前を考えるのです。「マルコなんて、どうかなあ」「えー、マルコ、そんな日曜日の夕方のテレビマンガの主人公みたいな名前や。だめだめ」「ヨナなんて、どう」「ヨナか、なんかかわいいスケートの選手みたいな名前やなあ。かわいすぎへんか」「んん、この子はザカリアという名前がええんじゃないか。おおー、そうか、お前もそう思うか。この子、ザカリアがええかって聞いたら、うん、うんって首ふりよったで。エリサベト、エリサベト、この子、ザカリアって名前に決まったで」。

エリサベトが「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言うと、「えー、それはちょっと、おかしいなあ。第一、わたらの親戚にはそんな名前の人はおらんわなあ。こういうことはな、伝統ということが大切やから、そうそうその伝統を曲げることはできへん。わかるか、エリサベト」。というように、なんか親戚が集ると、妙にその中で理屈をこねるおじさんがいたりするわけです。わいわいがやがやと、とにかく騒がしいのです。

まさに、人間の営みだなあと思います。私たちと似ていると思います。ちょっとむつかしい人がいたり、間の抜けた人がいたり、強引な人がいたり。でもみんなザカリアとエリサベトのことを祝福し、そしてバプテスマのヨハネの誕生を祝うためにやってきたのです。「よかったねえ、エリサベト。ほんとに、よかったねえ」「ザカリア、おれはほんとに、うれしい。うれしいぞ、ザカリア。こんなにうれしいことはない」。そんな人たちが集って、わいわいがやがやとお祝いしているのです。人々はこういう日常の営みを続けながら、そして救い主の誕生を待っていたのです。いろいろな人がいて、そして互いに受け入れ合いながら、思いやりながら、救い主の誕生を待っていたのです。そしてそうした人々のところに、救い主イエス・キリストは来てくださったのです。

ザカリアはこんなふうに預言しています。「憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く」(同 78—79 節)。神さまの憐

れみによって、救い主が私たちの光としてきてくださる。そして私たちを平和の道へと導いてくださる。ザカリアたちはわいわいがやがやと、日常生活を送っていました。しかし、ころはしっかりと神さまに向け、神さまの憐れみによって自分たちが生かされていること、そして神さまは必ず私たちを救ってくださるということ、ころに留めて生きていました。

ザカリアたちは神さまの力と共に生きていました。神さまの憐れみを受けて、神さまの力に守られて生きていました。神さまの力と共に生きるということは、敬虔そうに生きるということではありません。信仰深そうに生きるということではありません。互いに欠けたところは補い合い、そして互いに許し合いながら、自分たちが神さまの憐れみの中に生かされていることを、しっかりと心に留めて生きていくということです。

私たちは愚かさを抱え、また弱さを抱えて生きています。そんな私たちのために、神さまは救い主イエス・キリストを送ってくださいました。イエス・キリストは私たちを照らし、私たちを平和の道へと導いてくださいます。新しい年も、救い主イエス・キリストと共に歩みましょう。

2022年 12月7日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録